

# 第46回縮小社会研究会



時：2019年10月12日、13:00～17:00

所：所：同志社大学 烏丸キャンパス 志高館 SK118 室 烏丸今出川交差点より北に500m、

地図：[http://global-studies.doshisha.ac.jp/access\\_map/access\\_map.html](http://global-studies.doshisha.ac.jp/access_map/access_map.html)

米中や日韓貿易、ブレグジットなど世界の政治・経済は混乱を続けていますが、国家や企業は経済成長を志向し続けています。一方、SDGs や若者の環境を守れという動き（Friday for Future）も台頭してきました。今回は、文明の崩壊に焦点を絞り、ソ連の崩壊で何が起こったのか、灌漑用水の取りすぎによる世界第4位の湖であったアラル海の消滅について話題提供をします。また、財政赤字を心配する必要はないというMMT（Modern Monetary Theory）や反緊縮という言葉が聞くようになってきましたが、これについて解説します。

13:00-14:00 **アラル海の消滅** 石田紀郎（元京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科教授）

中央アジア5ヶ国にまたがるシルダリアとアムダリアは各国の生命線であり、河川の長さはそれぞれ2000キロ以上である。最終的にはアラル海に流入する両河川の流域で1960年代から始まった大規模灌漑農地開発でアラル海の9割が消滅した。ソ連邦崩壊後に各国は独立し、それぞれの国・地域での水利用は異なるので、流域社会の違いを認め合う水政策が必要とされている。アラル海消滅後のこの地域での環境問題を報告する。

14:10-15:10 **国家崩壊時の教訓と歴史発展パターン** 大谷正幸（金沢美術工芸大学教授）

気候変動の激化、成長の限界、金融危機といった苦境の中で、数年前からフランスでは、collapsologie(崩壊学)という学問が始まり、崩壊と崩壊後の再生についての議論をしている。ソビエト崩壊などを回顧しつつ、今日の社会情勢をシュペングラーおよびトインビーの長期的な視点の文明論に照らして考察する。

15:20-16:20 **MMT, 反緊縮とは何か** 宇仁宏幸（京都大学経済学部教授）

まず、貨幣量と貨幣価値を決めるメカニズムを説明する貨幣理論の3つの類型を説明する。それは、民間の活動と国家の活動との関係のとらえ方にも関わっている。次に、貨幣理論の諸類型のなかでのMMTの位置を説明し、その意義と限界について述べる。反緊縮論については、ヨーロッパ通貨統合の実際のしくみがもつ欠陥が、南欧諸国での反緊縮論の背景にあることを説明する。

16:30-17:00 **パネル討論** 講演者

懇親会：17:30-19:30 場所：芙蓉園（烏丸今出川西） 費用：2000円+飲み物代

研究会参加費：会員は無料、非会員は500円

参加登録：下記の自動登録よりお願いします。

[http://confreg.ate-mahoroba.jp/confreg?conf\\_idstr=e7ZcODvFrkjJZQndFTwbGjiw1061](http://confreg.ate-mahoroba.jp/confreg?conf_idstr=e7ZcODvFrkjJZQndFTwbGjiw1061)